

みずいろ

ノーカット版

101号 No.2

第65回 日本PTA全国研究大会 仙台大会

全体会 記念講演「オリンピックへの挑戦」

～家族の絆で掴んだ父娘メダル～

◆ウエイトリフティング選手 三宅 宏美 氏

(ロンドンオリンピック銀・リオデジャネイロオリンピック銅メダリスト)

◆日本ウエイトリフティング協会会長 三宅 義行 氏

(メキシコシティオリンピック銅メダリスト)

キュートで小柄ながら107kgの重いウエイトを持ち上げ、見事オリンピックで二連続メダルを獲得された三宅宏美さん。その父で宏美さんの監督でもある三宅義行さん。さぞかし厳しい方なのだろうと思いきや、序盤から「監督は、ただのじいちゃん」と屈託なく笑う姿に会場が和みました。

目標に向かって親子二人三脚で歩む体験談は、会場で聴くPTA会員にとっても非常に関心の高い話です。「ウエイトをやってみたい」と言った宏美さんに、義行さんは始めるにあたり「途中で絶対あきらめない」「どうせやるならオリンピックで金を取れるまでやろう」という二つの条件を出したそうです。家族ぐるみで、父は監督として技術面を、母は仕事を辞めて栄養管理面をサポート、また兄は同じウエイトの良き相談相手として共に進んでいきます。ウエイトは痛みとの戦いで良い状態をキープするのは難しい。義行さんは常に宏美さんを見守り、時には「予言者」のようにオーバーワークを言い当てることもあるそうです。「父は私のことに気付いてくれている」という感覚が嬉しかった、と宏美さん。常に娘さんの様子を気にかけて応援している姿に、親である自分も考えさせられました。

最後に次期東京オリンピックに向けて一言！との声に「やるからにはてっぺんを目指したいです！」と明るく答えた宏美さんの姿。震災で被災した東北の中での初めてのPTA全国大会。復興への道を進む仙台の地で、さらなる元気を見せていただいた、そんな気持ちになる講演でした。

第1分科会 組織運営

研究課題 多くの仲間と活動できるPTA活動を求めて

全ては子どもたちのため みんなで一緒に活動しよう

第1分科会は、子どもたちによる「長命太鼓」で賑やかなオープニングとバンカラ応援団OBによる「青空応援団」の心からのエールに感動した歓迎アトラクションでした。

NPO法人コヂカラ・ニッポン代表の川島高之氏から「PTAは期間限定の特権」をテーマに基調講演があり、保護者がやりたいと思わせる仕掛けづくりや誰でもが参加できるような運営によって、学校に行く機会が増えたり、知人・友人が増えるといった、PTAのメリットが見えてきました。



続いて、前青森県平川市連合PTA会長の齋藤 望氏から「家庭でも職場でもない『サード・コミュニティ』としてのPTAの役割」と題して実践発表が行われました。齋藤氏は、第一回小・中PTA合同懇談会&懇親会でワールドカフェという話し合いの手法を取り入れてコミュニケーションが図れた事例を紹介されました。

会員が集う場所作り、きっかけづくり、仲間作りの必要性は、PTAというコミュニティが家庭でもない職場でもない「サード・コミュニティ」としての重要な役割であるということを確認することができました。



第3分科会 学校教育

研究課題 協働による学校教育の在り方を求めて

家庭と学校と地域をつなぐ「子」コミュニケーション

“今の学校には踏み込んでいけないところがある” パネルディスカッションで飛び出した言葉でした。“そこへ 家庭・地域が入って行って、支え合って、解決の糸口を見出していく”という展開でした。「この先、学校も行政もアテにはならない！」と感じている筆者（ちょっと言い過ぎですが、学校が何かしてくれるだろうとか行政が支援するのが当たり前なんて言ってる場合じゃない！自分たちでもやってやろうじゃないかというココロイキが大事だ！と思っているのです）にとっては、前のめりで喰いつく話題でした。

それはさておき、家庭・学校・地域をよりよい連携で結ぶためには、「子ども」を中心に「子」コミュニケーションを取ることが大事！私たちPTAは「つなぐ」ために どのようなことができるのか？という課題で行われた分科会でした。

パネルディスカッションに先立ち 宮崎稔氏による基調講演がありました。宮崎稔氏は 校長・教育センター長を歴任され、学校と地域での教育に関わる様々な現場で指導・研究を重ねられた方です。（宮崎氏の活動は “宮崎稔 地域と学校”などで検索を）「学校と地域のかろやかな協働」と題し、たくさんの事例を挙げてわかりやすくお話ししてくださいました。

1□ ピンチをチャンスに！事例

不登校が多く、地域からのご意見（クレーム!!）の多かった小学校が

➡ ‘教育力がある’モデル校にかわった

何をしたのか？ ①空き教室を 地域の会議や事業に活用してもらう

②クラブ活動に 地域の人材活用

③ゴロゴロ図書館

④地域との合同運動会 他

すると 7者のメリットが生まれた！

不登校ゼロ！ 全ての子ども達が元気に学校へ

教師は更に学校での教育に専念できる これは子ども達に還元されていく

中高生の居場所ができた！

小学校での地域事業や合同運動会等に参加する中高生には母校での居場所ができて

小学生や地域の方々とのふれあいは 大家族コミュニケーションを形成

子育ての悩み相談 学校に行けば気軽に話せる人がいる

父親は 職場以外の仲間ができた

地域の人材として子ども達に指導したり、ふれあったりして高齢者に生きがい・やりがいを感じてもらえる

これは大きな福祉！

自治会役員さんにとっては 新しい地域の方や若い世代の方と知り合いになれる機会

この人なら頼めそう〜と後継者探しに期待

役所に予算がなくても!? ボランティア活動を積極的にして下さる方々のおかげで

学校の保持を支えてもらえる

税金は更に有効に住民に還元される

この事例の内容は、もう既に全国的に実践されてることも多いかと思います。でも 最初にやり始められた頃は 一つひとつが挑戦であられたらだろうし、一朝一夕で結果が得られたわけではないだろう。

宮崎氏いわく・・・昔は(ゆるやかな時代) 自由で工夫の余地がありました。うまくコミュニケーションがとれていて、地域や学校や家庭でのつながりができていました。現在、世の中は豊かになったが、失くしたものもいっぱいあります。自然に(地域で子育てを!とか意識しなくてもという意味で)子育てできなくなってるのなら、今は敢えてやっけていく、仕掛けていくことが大事な時代。

2口 花火大会自主運営 事例

住宅地のなかの小学校。夏に花火をするのも近所の迷惑を考えるとオチオチできない。

小学校でできたらいいのに!

学校に相談、とともに消防署への連絡やら 参加ルールづくりは親たちでバッチシ!

何かあっても 校長先生に責任がいかないように ‘こっちでちゃんとやるからさあ’

当日約200人もの家族や地域の皆さんが集まって無事楽しく盛り上がりました。

ゴミは持ち帰るのルールも徹底され(翌朝ちょっと心配で行ったら2本だけが落ちていたのみ)胸をなでおろしました。

宮崎氏いわく・・・“相手の立場を慮って“というのが大事。(ここだけの話 じゃあないですよ)

規制がアレコレ厳しくなって 学校では何もできなくなってるかもしれない。でも 子どもたちが育つトコロであるのは勿論、コミュニケーションの場としても生涯学習の場としても学校はまだまだ地域の拠点。ならば保護者・学校・地域の諸団体他 それぞれの立場を思い合って(学校を舞台にイロイロやるけど責任は自前!ってことかな?)に積極的に関わっていこう!

学校の教育力を支える地域の知恵。この知恵が豊かになれば いい地域の中のいい学校になって いい子が育つ。いい子が育つ学校と地域はきっと オモシロイ!!というようなお話。

宮崎氏の講演・パネルディスカッションともに 楽しく、大いに参考になる分科会であった。

第4分科会 広報活動

研究課題 保護者や地域へ更なる発信力を求めて

P T A活動の魅力伝えよう

(基調講演) 酒井美紀氏

現役の子育て世代として、積極的にP T A活動に参加されているお話を、エピソードを交えながらお話していただきました。一貫して感じられたのは、自分の子どものために、自分の子どもの周りにはいる多くの子どもたちのために、親として何ができるかを真剣に考えておられるなということ。そして、そういう思いの中で行うP T A活動を楽しんでおられるなということでありました。多忙な仕事の合間を縫って子どもとかかわり、P T A活動に参加するのは負担も大きく決して楽なわけではありません。そんな中で、子どものためになっていることに喜びとやりがいを感じている姿が生き生きと伝わってきました。後半では国際協力N G Oワールドビジョンジャパンの親善大使として、世界の子どもたちの安心安全な生活を構築していく運動にも精力的に参加されていること、その活動内容やその活動に対する思いを語られ、けっして一過性のものではない確かな信念をお持ちであることに敬服しました。

(実践発表) 全仙台市立富沢中学校P T A会長 鹿又勝彦氏

小学校・中学校とP T A会長を歴任された中での経験談や苦労話、成功話を聞かせていただきました。特に広

報活動についての話でしたが、(実のところあまり印象的な話はありませんでした)、後半のパネルディスカッションに重なる部分もあり省略させていただきます。

(パネルディスカッション)

大学教授のコーディネートのもと、JICA職員、新聞記者、小学校教頭、元PTA全国協議会副会長(TV局勤務)らのパネリストが、広報活動の在り方をテーマに意見交流を行いました。広報活動の媒体としてPTA活動においては紙媒体(新聞)の利用が一般的ですが、近年電子媒体(ホームページやメールなど)の利用も増えてきています。どちらが良いというわけではなく両方の利点を生かして併用していく道をそれぞれの立場から述べられました。また、PTAに対する関心の薄さ、協力がなかなか得られない現状を踏まえて情報発信する側の留意すべき点、特にどうやったら新聞を読んでもらえるか、どうやったらホームページを開いてもらえるかの示唆に富む発言が多数ありました。ただ、締めくくりにある方がおっしゃられた、「もっとやる気を持ってPTA活動に参加していくべきだ」という趣旨の言葉は、末尾での発言だけに重たく感じました。多くのPTA会員がなかなかそう感じられない、負担感ばかりでやる気が出ない現状を把握し、その原因を探り、どうしたらそれを打破できるような活動や広報をすべきかを論じるべきではなかったか、そういう締めくくりであってほしかったと思います。



第5分科会 地域連携

研究課題 地域と共にあるPTA活動の在り方を求めて

家震災の経験を活かして取り組む地域防災

第5分科会にて 2011年3月11日とある小学校の校長先生が直面した現実の話です。既存の地震対応マニュアルに不安を覚え、子どもたちの命を優先させるため、改訂を提案するも周囲の理解を得られず宙ぶらりんのまま迎えた2011年3月11日。その時、得た教訓は熟考したベスト案より、即断したベター案が生死を分けた事であります。

津波から逃れるため、近場の高台へ避難したものの、本震と同等の余震が散髪する中で孤立し暗闇で耐え忍んだ一晩を過ごしました。襲ってくる底冷えを防ぐには、余震が続くなかであるが傍らの神社境内内に子どもを収容すべきか苦悩しました。そんな中、ともに避難した顔見知った地元の方々から誰が取りまとめるわけでもなく子どもたちを中央に集め、周りを大人が囲み子どもを凍えさせないよう配慮しました。声掛けし不安を取り除き、支え合いました。次の日、全員が生還できました。顔が見える絆があればこそその結果でした。

昨今、PTAに限らず地域の交流・人とのつながりが希薄になりつつあります。しかし、大規模災害の前には人々は団結しないと立ち向かえません。イベントや行事を催す必要はありません。地道な活動、顔つなぎがPTAの役割であろうと思います。学校と地域を結ぶ懸け橋になる事こそ、子どもたちの笑顔、輝かしい未来を守る地域力であり、PTA活動の本懐です。

特別第1分科会

研究課題 「いじめ」何が起きているかを知る

各学校で定められているいじめ防止基本方針知っていますか？私は知りませんでした。いじめ防止対策推進法により各学校で定められています。PTA全国研究大会から帰宅後早速自分の子どもが通っている中学校のいじめ防止基本方針を確認しました。

いじめは小中高含め年間22万件、1校あたり6件、1学年あたり2件となり、遠い世界のことでなく身近に起こっていることがアンケートの結果から伺えます。中学生のいじめは大人が把握しづらい。そのわけは、中

学生では同世代の仲間づくりおよび大人からの自立という課題があるため、いじめが起こっても大人には話さない。それは子どもが大人を信頼していないから話さないわけではなく、大人からの自立を課題として抱えているからであります。いじめが発覚した場合はいじめられている子を守る。いじめを止めることが最重要であり、こころのケアが必要。これは当事者だけでなく、みてみぬふりをしてきた傍観者へのケアも必要となります。いじめは顧問や担任にみつからないようにするため、早期発見のためには我が子と親、我が子の友達と親、親と担任など地域全体としての日頃のコミュニケーションがとても大事になってきます。また、いじめが発覚した場合には担任だけで解決できるものではないため、担任だけでかかえこまず、保護者、地域のチームとして対応することが重要になります。そしてチームとして機能するかに、日頃の担任、親、子ども、地域でコミュニケーションができていのかにかかってきます。母親がスーパーなどで、よく買い物をする前に井戸端会議をして、子どもたちの情報交換をしているのも地域で子どもを守るために、これも非常に重要なことです。



一方、幼稚園の立場からは幼稚園児にはいじめはありません。ケンカはするけど次の日には忘れていきます。ここにいじめの減らすためのヒントがあるのではないのでしょうか。ただ、幼稚園でも保護者同士や保護者と先生の間にいじめはあります。

職場でのいじめ、ママさんサークルでのいじめ、家庭不和（妻を夫がいじめる・嫁姑問題）などを見て育てている子どもはそれが当たり前だと認識してしまい、子ども社会でも同じように行われてしまいます。子ども社会は大人の社会の縮図であり、大人社会でのいじめがなくなれば子ども社会のいじめもなくなる（減らせる）のではないかというコメントもありました。

いじめはいつ、いかなるときでも起こり、起こった場合の解決には時間かかり、解決しないこともあります。そのため、いじめは早期発見、未然防止の重要性、地域として子どもを育てることの大切さを再認識した分科会でした。

特別第2分科会

研究課題 支援される側から支援する側へ さらに一歩踏み出した子どもたち 子どもたちの支援活動を支えるためにPTAとしてできることを考えよう

東日本大震災から6年。当時のことを今でも覚えています。テレビの画面の向こうで津波が建物・橋・車を飲み込み上流へ上がっていく。映画の一シーンであって欲しいと祈らずにはいられませんでした。今回、仙台で開催されることを聞き 是非参加したいと申し込んだ次第です。

“支援される側から支援する側へ”のテーマのごとく 「自分たちでも何かできないか」という子どもたちの情熱・行動力。この気持ちを、学校の先生・保護者・専門職の方、そして地域の人たちが応援し、少しずつ失敗を繰り返しながらも成長していくという貴重なお話を聞き、継続していくことの大切さを学ばせていただきました。

私の住んでいる区でも毎年防災訓練を実施していますが、「忙しいからいいや」と参加しない年もありました。しかし子どもたちを守るのは大人であり、自分のこととして防災のことには取り組んでいかななくてはならないと思いました。また 子どもの気持ちや発想力の芽を摘まないようにしていきたいです。

基調講演 子どもたちの活動力 ―災害時と復興期のエピソードから―

田端健人 氏 (宮城教育大学教授)

小さな子どもや高齢者を助けて津波から避難させた中学生、仮設住宅で花や歌を贈った子どもたち、まちの復興のアイディアを出したり、災害を語り継ぐ活動をし始めたり、小中高校生、大学生など、様々なエピソードと これを支えた大人たち思いや活動を紹介。

パネルディスカッション

保護者（PTA）・教師・行政の代表、震災当時の中学生 佐々木夏海さん（ジュニアリーダーとして 避難所でボランティア活動をされ 様々な支援活動に参加）、そして基調講演の田端氏を交え、7人でパネルディスカッションが行われました。防災教育や 子ども達を中心に行う支援活動の在り方、地域の連携などについて意見が交わされた。

第43回日本PTA近畿ブロック研究大会大阪府大会

第3分科会 人権学習

発表者：兵庫県福崎町立福崎西中学校PTA

体育大会の保護者も参加する「長縄大会」の「みんなのジャンプがバラバラで、子どもにかなうわけじゃないですねー」と笑顔で説明して下さった写真がほのぼのして良かったです。会長さんが走りに全力尽くされて打ちひしがれる写真があり、すごい頑張っている！と思いました。子どもといっしょに保護者や先生方も楽しく活動されているようすがよく伝わりました。一緒に「汗を流し、笑い、悩み、考える」ことが大切で、実践されていると感じました。また、ゆるキャラの着ぐるみ「ふくにっしー」が可愛かった！近江八幡でも作りたい！と思いました！

発表者：滋賀県長浜市立びわ北小学校PTA

「学力だけではなく心の成長を思う声」「個性って何なんだろうか」「自分を大切にすると何か、相手を大切にすると何か」「命の大切さを振り返る」・・・ハッとするような言葉の数々。森岡さんの声もととても素敵で、よくよく吟味され発せられる丁寧なコメントに引き込まれました。余談ですが、森岡さんがされた林智子さんのお話。偶然にも大阪府大会の翌日は近江八幡市PTA大会。そして近江八幡にお招きした講師は林智子先生！！運命を感じました。生まれてすぐ心臓に疾患があり、手術を繰り返しながら6歳まで生きた明音ちゃんを育てられた林さんのお話、大阪府大会では短い時間でしたが、翌日しっかりと感動いっぱいのお話を聞く事もできました。

特別分科会 演題「みんながつくる みんなの学校」

～地域の学校にすべての子どもが安心して学べる居場所を

講師 木村泰子氏 大阪市立大空小学校初代校長

平成29年10月27日大阪国際会議場にて日本PTA近畿ブロック研究大会が開催されました。

午前中は、6つの分科会が開催されました。特に特別分科会となった第6分科会には800名の参加者が、大阪市立大空小学校初代校長 木村泰子さんの講演に熱心に耳を傾けました。

講演は、「健常者と障がい者って？」という問題提起から始まりました。電車内で大きい声で叫ぶ知的障がいの子に出会った時にどんな態度をとるか、見て見ぬふり、ウチの子じゃなくてよかった、なんて思う人がほとんど。そんな子も共に暮らせるような社会を作りたい、大空小学校はそんな思いにあふれている。「先生の言うことは聞くもんだ。静かな環境で学習できる学習規律こそ重要」という学校文化を変革すべきだという理念で教育を進めている。集中力を高めれば騒がしいなかでも学習はできる。過去問題や「〇〇タイム」なんて設けなくても学力調査の点数を上げることはできる。また、規律の乱れは授業者が生み出すもの、興味を持たせる授業をすれば規律は維持される。個性がある子たちを集団のなかで生かしながら生活させる、重度の知的障がいの子が叫んでいても、それを騒音ととらえて静かにさせるか、それとも、コミュニケーションの手段ととらえるかで大きな違いがある。騒音ととらえてしまえば、「まわりの人とかかわるな！」と言っているのと同じである。学校のトラブルを「学び」に変えるか「いじめ」にしてしまうかは、まわりの大人対応次第である。大人は「ジャッジ」

するのではなく、「通訳」する役目を果たすべきである。どんな行動にも理由がある。納得してトラブルを解決する力を身につけることが大切だ。大人が支え修正するのではなく、自分で正していけるか。私たち大人が、子どもに夢を実現させるためには次の4つの力が大切である。

- 1 他人を大切にする力
- 2 自分の考えを持つ力
- 3 自分を表現する力
- 4 チャレンジする力

学校の先生は、地域の「風」に過ぎない。いつか異動して学校からいなくなる。それに対して地域住民は地域の「土」である。学校職員の役割は、その土に栄養を与えること、「保護者」ではなく、「サポーター」として学校を支えてもらう、自分の子以外の子の面倒をみてもらえるような関係作りを大切に今も歩みつつある。

記念講演 演題 笑って楽しく生きていく

講師 角 淳一 氏 元MBSアナウンサー・タレント

午後の記念講演は、元MBSアナウンサーの角淳一さんによる講演「笑って楽しく生きていく」がありました。角さんは多くの講演をされているのですが、内容は毎回変われど演題はいつも同じだそうです。以前に13年間パーソナリティを担当した深夜ラジオ「MBSヤングタウン」を通してのリスナーとのやりとりから学んだ人の優しさを、様々な人々の人生に向き合い、命のつながりを感じ、自分自身が成長していく様子を話されました。



毎週9000通を超えるハガキが届く人気番組。そのなかには「死ね」書かれたものもあった。心ないハガキに怒りを覚え、マイクの前で破る音を電波に乗せた。クレームの電話が後を絶たず、翌週には苦情のハガキが殺到した。その中には、「これなら破れないだろう」とのメッセージが書かれた板に切手の貼ってあるものも。のこぎりで板を切る音をマイクに拾わせると、翌週にはブリキのハガキが、それを電動ドリルで穴を開け、これ以上のものはないだろうとっていると、翌週にはかわいい動物の絵はがきが届く、「これでも破れますか？」と。その後は、色とりどりの絵はがきが届くようになる。映像のないラジオ番組に。苦情から始まったやりとりは、人の優しさを感じるエピソードとなった。

ある時には、自閉症の少年が20万円を持って自転車で家出をした。「助けてほしい」という母からの悲痛なメッセージも届いた。母を励ますことしかできなかったが、家出人捜索番組に出演した母を見て少年は戻ってきた。彼は自転車で四国へ行ったが、うまくいかずに船で北海道へ、そこで牧場で住み込みで働いていたそうで、家出した時に20万円だった所持金は、60万円に増えていた。

角さんは、父の顔を知らずに育ったそうです。父は妻の身体に子が宿ったのを知って戦地に向かい、帰らぬ人となった。母は一生懸命に育ててくれ、孫となる我が娘も母となる日がきた。初孫を抱いて父の仏壇に報告した時、不思議なことに涙が止まらなかった。これが命をつなぐことなんだという思いだったのかと思う。その後、母が亡くなり、遺品を整理していたら父が戦地から出した手紙がたくさん出てきた。まだ見ぬ我が子に会いたい思いが綴られた手紙から父の無念さを感じた。私自身も残された人生を楽しみたい、父の分まで楽しまねばならないと深く思った。

笑福亭鶴光さんや永六輔さんとのエピソードを交えながら、幼小の頃からの夢であったアナウンサー人生から得た体験をユーモアあふれる語り口で語られました。